

都道府県名	徳島県
-------	-----

学校の概要（平成15年4月現在）

学校名	鳴門市鳴門中学校					
学年	1年	2年	3年	特殊学級	計	教員数
学級数	2	2	2	0	6	14
生徒数	45	49	47	0	141	

研究の概要

1. 研究主題

基礎・基本の定着化を図るための指導方法の工夫改善

2. 研究内容与方法

(1) 実施学年・教科

<ul style="list-style-type: none"> ・ 1年数学 生徒の理解の状況に差が出やすい教科であるため。 ・ 2年数学 生徒の理解の状況に差が出やすい教科であるため。 ・ 3年数学 生徒の理解の状況に差が出やすい教科であるため。 ・ 1年国語 各教科の学習の基礎になる教科であるため。 ・ 2年国語 各教科の学習の基礎になる教科であるため。 ・ 3年国語 各教科の学習の基礎になる教科であるため。 ・ 2年英語 生徒の理解の状況に差が出やすい教科であるため。 ・ 3年英語 生徒の理解の状況に差が出やすい教科であるため。

(2) 年次ごとの計画

平成15年度	<p>テーマ 「基礎・基本の定着化を図るための選択授業の工夫」</p> <p>研究の見通し（仮説） 国語・数学・英語科（選択教科）において、少人数編成とT・T・指導を取り入れ、分かりやすい授業を展開するとともに、生徒の習熟度に合わせたきめ細かな指導をすることにより、基礎学力の定着化を図る。</p> <p>研究の内容・方法 選択教科におけるT・T・指導 選択教科の中で、国語・数学の2教科（2、3年生は国語・数学・英語の3教科）の中から1教科を選択する「選択基礎教科」を開設する。（1年生は年間35時間、2年生は年間30時間、3年生は年間60時間）国語・英語はそれぞれ2人、数学は3人の教師が指導に当たる。この「選択基礎教科」の目的については、学期初めのオリエンテーションで、国語・数学（・英語）は、全ての学習活動の基礎であることから、疑問点などを解消するための学習であることを確認する。また、どの教科も複数の教師が指導を行い、内容によっては習熟度別のグループ学習の必要性を理解させ、生徒に選択させる。 ・国語1年：漢字テスト（小学校での学習漢字10問）を毎時間実施。次回の出題を予告し、意欲づけを図る。特に誤答した漢字については集中的に練習</p>
--------	---

させ定着化を図る。

- ・国語2～3年：漢字の読み書きや平易な文章の読解ができることを目標とする。前半は小学校高学年で学習した漢字の問題を中心に、後半は基本的な文章問題を中心にして、各自の進度に応じた学習プリントを用意する。漢字テストは同一問題を読みとりと書き取の連続的な学習活動により定着化を図る。同一問題のテストを定期的に繰り返し、各生徒の学習成果を確認する。
- ・数学1年：四則計算の力をつけることを目標にする。計算練習小テスト、四則計算百マス計算をドリル形式で実施し、巡回指導を行う。毎時間、取り組み方について自己評価させる。
- ・数学2～3年：四則計算の力をつけることを目標にする。四則計算百マス計算、小テストをドリル形式で行い、巡回指導を行う。その成果の上に各自の興味・関心や能力にあわせた課題解決学習の指導方法や教材開発に取り組む。また数学検定合格に向けての学習も取り入れ、目標を持った学習ができるようにする。学期の初めと終わりに同一問題のテストを行い正解数を比較し、指導の資料にする。課題やテーマをもって追究できたかどうかについて自己評価ほか、アンケートによる自己評価も取り入れていく。
- ・英語2～3年：英語理解の基礎である英単語を理解し、覚えることを目標とする。品詞ごとに単語テストを行い、定着化を図る。生徒一人ひとりの能力に合わせて学習が進められるよう、あらかじめ習得させたい単語を先に知らせ、充実した家庭学習ができるよう工夫する。また、進度が早い生徒のために別教材も準備する。毎時間の取り組みを自己評価させていく。

平成16年度

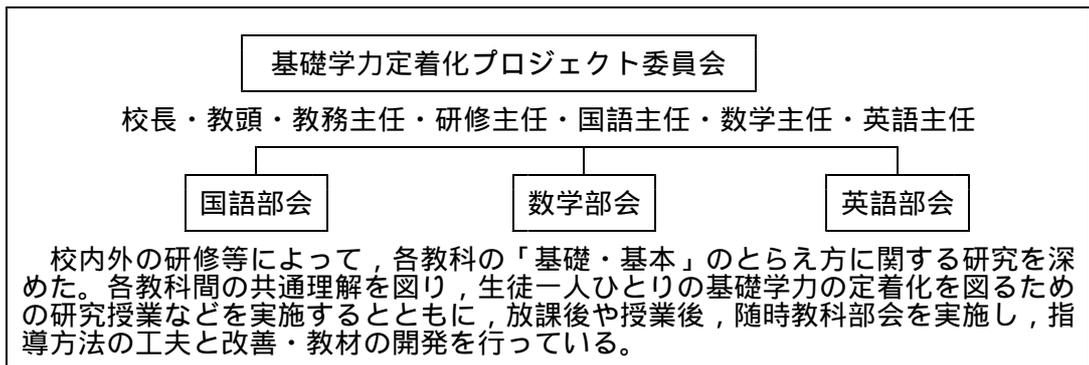
テーマ
「基礎・基本の定着化を図るための国語科・数学科の授業の工夫」

研究の見通し
国語・数学において、少人数編成とT・T・指導を取り入れ、分かりやすい授業を展開するとともに、生徒の習熟度に合わせたきめ細かな指導をすることにより、基礎学力の定着化を図る。

研究の内容・方法

- ・国語・数学（必修教科）において、T・T・指導、習熟度別編成、少人数指導を実施する。
- ・効果的な教材の自主制作を目指した研究推進体制の見直しをする。
- ・読書習慣をつけるための取り組みを行う。

(3) 研究推進体制



平成15年度の研究成果及び今後の課題

1. 研究成果

選択教科におけるT・T指導の成果と課題

- ・選択教科のオリエンテーションで、疑問などを解消するための学習活動であることを説明したおかげで、授業への取り組みはどの生徒もおおむね良好であり、自ら課題を追究しようとしている。毎時間行う自己評価も習慣になり、学び方を学ぶという姿勢もできつつある。複数の教師で指導しているの、生徒のつまずきにも気づきやすかった。
- ・多くの教員が携わることにより、基礎学力定着に関する共通理解が図られ、指導に当たる教員一人ひとりの意識が高まった。
- ・生徒にアンケートをとることにより、教師が授業を見直し、分かりやすい授業、分かりやすい教材開発を目指すようになった。
- ・T・T指導、習熟度別編成、少人数指導等、様々な方法を試行しようという教員の意識ができた。

2. 今後の課題

課題としては、教材開発の難しさがどの教科にも挙げられる。現在、国語は漢字学習、数学は計算練習、英語は英単語練習を主に行っているが、生徒間の習熟度格差が広がっている。複数の教師で指導しているが、特に学習速度の速い生徒にも別の課題を準備する必要がある。決まったテキスト類を使用していないので、毎回の準備には労力を要する。また、教科ごとに設定した「学習の基礎」としての目標も徐々に変えていく必要が出てきたが、次のステップで何をどんな形で学習させるか熟考しなければならない。取り組みに対する姿勢は良好な生徒が多いが、どちらかといえば苦手な教科を選択しているため、教師による評価についても難しい点がある。国・数・英の評価の視点を明確にする必要があり、評価の観点や規準についての共通理解を図らなければならない。自己評価の仕方についても今後検討する必要がある。

学力把握のための学校としての取組

・数学科（第2学年）において、計算能力テスト（数学検定5級程度）を1学期当初（4月）と3学期終わり（3月実施予定）に実施することにより、学力の定着化を測っている。

フロンティアスクールとしての研究成果の普及

・「選択教科（数学科）における“連立方程式”の指導」（習熟度別指導方法と指導資料）を教育用コンテンツとして、県教委のWebページに公開（予定）

・校内研究授業（随時）

次の項目ごとに、該当する箇所をチェックすること。（複数チェック可）

- | | | | | |
|----------------------|--|--|--|--------------------------------|
| 【新規校・継続校】 | <input checked="" type="checkbox"/> 15年度からの新規校 | <input type="checkbox"/> 14年度からの継続校 | | |
| 【学校規模】 | <input type="checkbox"/> 3学級以下 | <input checked="" type="checkbox"/> 4～6学級 | | |
| | <input type="checkbox"/> 7～9学級 | <input type="checkbox"/> 10～12学級 | | |
| | <input type="checkbox"/> 13～15学級 | <input type="checkbox"/> 16学級以上 | | |
| 【指導体制】 | <input checked="" type="checkbox"/> 少人数指導 | <input checked="" type="checkbox"/> T・Tによる指導 | | |
| | <input type="checkbox"/> その他 | | | |
| 【研究教科】 | <input checked="" type="checkbox"/> 国語 | <input type="checkbox"/> 社会 | <input checked="" type="checkbox"/> 数学 | <input type="checkbox"/> 理科 |
| | <input checked="" type="checkbox"/> 外国語 | <input type="checkbox"/> 音楽 | <input type="checkbox"/> 美術 | <input type="checkbox"/> 技術・家庭 |
| | <input type="checkbox"/> 保健体育 | <input type="checkbox"/> その他 | | |
| | | | | |
| 【指導方法の工夫改善に関わる加配の有無】 | <input checked="" type="checkbox"/> 有 | <input type="checkbox"/> 無 | | |